

## オルガノン要約 § 54～62

§ 54 アロパシーは病気に対していろんなことをするが、すべて不適切である。アロパシーの病名は治療法ごとにばらばらであり、薬の作用は憶測にもとづいている。つまり、患者からどんな有害物質をどのように除去したら良いのか？を憶測に基づき、指示を出してきたのである。にもかかわらず、合理的医療の名で栄光を添えられている。

§ 55 アロパシーの治療体系を忠実に導入すると患者の状態は非常に深刻になる。一時的に緩和する術を持たなければ、医師は患者からすぐに見捨てられていたことだろう。アロパシー医は緩和さえすれば良いと考えて来た。

§ 56 緩和療法（アンティパシーとエナンティオパシー）の方法はガレノスの「反対のものは反対のものによって」という教えに基づいて導入された。この方法でほとんど瞬時に症状を改善させることによって患者をだまし、信頼を得た。

この治療法がどれほど役に立たず、危険かを以下の段落で見よう。

アロパシー医の治療法で重要なものは、自然の病気の一部に対して正反対の関係をもたらすアンティパシー的治療だけである。

（注）アイソパシー：疥癬組織からレメディをつくり、疥癬に適用しようとするというもの。これがもたらすものは治療の失敗と病気の悪化である。

§ 57 アンティパシーでは、病気の多くの症状には注意を向けず、たった一つの厄介な症状に対してのみある薬を投与する。これで最も迅速な緩和の治療ができると考えた。

緩和治療の例。

アンティパシー（通常医学）の薬の種類は限られており、効能（一時作用）もわずかでしかない。

§ 58 アンティパシーでは、たった一つの症状だけが一面的に考慮されているにすぎない。したがって病気全体の治療は明らかに期待できない。

アンティパシーによる短期の緩和作用の後には常に例外なく悪化が起こる。通常医学の医師は必ずそれを他の原因に転嫁する。

（注）緩和の後の悪化の例。

§ 59 反対のものによる緩和の作用によって、病気の重い症状が治療されることは決してない。むしろ必ず増幅させ悪化する。

緩和療法による悪化事例・・・一時作用（緩和）の後には二次作用（逆に向かう身体の自然作用）が起きて、より悪化するしかない。

§ 60 アンティパシーでは、その効果がすぐに切れるため緩和剤を次第に強くしていかなければならない。結果、より重い他の病気が発生する。もしくは治癒不可能な状態や生命に危険な状態が生じ、決して治癒しない。

（注）瀉血や飢餓療法などで患者の生命を削ることによって、苦痛を少しずつ徐々に和らげ、最終的に患者の生命を抹殺するというプルゼ氏の治療法は、全ての病気に対して適用された安易な方法で、多くの地域でもてはやされた。

§ 61 このようなアンティパシー的な療法の悲惨な結果を反省すれば、これらとまったく反対の療法（類似と微量：ホメオパシー）こそが真なる持続的な医術であることがわかったはずだ。しかし誰も気づくことはなかった。

§ 62 ホメオパシー的に健康を達成する事実は、身近な経験から知ることができ、非常に重要なのだが、これまで誰の目にも留まらなかった。